



◀ 8月24日(土) 食育講座の現地学習で安平町の「内藤あんがす牧場」に行きました。子どもたちは初めて見る肉牛の大きさにビックリ!
(報告記事 P7)

8月24日(土) 岩見沢市北村で大豆トラスト畑の交流会がありました。どしゃ降りの雨でしたが、楽しく心暖まる交流会でした。
(報告記事 P7)



発行

NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク
札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内
TEL (090) 2818-5502 FAX (011) 789-8890

ホームページアドレス
<http://jikyuu.net>
E-mail:info@jikyuu.net

知っておきたいタネの世界

今年度から新しく始まった「種(タネ)プロジェクト2013」は、6月に酪農学園大名誉教授で自給ネットワーク理事の中原准一先生に「誰がタネを制するのか」、8月に渡辺農事北海道営業所の安達英人所長に「いま流通している野菜タネについて」を講演してもらいました。中原先生にはその内容を含めて寄稿していただき、安達所長の講演は要旨をまとめました。

タネをめぐる多国籍企業と市場 —GM作物の健康被害への懸念—

酪農学園大学名誉教授 中原 准一

わたしは、『種(タネ)プロジェクト2013~知っておきたいタネの世界』第1回「誰がタネを制するのか」で、米国のモンサント社やデュポン社等の多国籍農薬企業が種子ビジネスに進出して巨大な利益を上げていることを指摘した。これは、アグリビジネス多国籍企業分析の第一人者である、京都大学大学院・久野秀二教授の見立てでもある。

2011年のGM（遺伝子組み換え）作物栽培面積は、①世界で約1億6,000万ha、うち米国、ブラジル、アルゼンチンの3か国で77%を占める、②同時に栽培作物をみると、大豆、トウモロコシ、綿花、菜種の4大作物で99.5%を占める（最近米国ワシントン州でGM小麦栽培が発見され衝撃を与えた）、③品種特性も除草剤耐性と害虫抵抗性ではほぼ100%、④大豆と綿花：総栽培面積の70%超、トウモロコシと菜種：同20～30%、それぞれ置き換わっている、⑤GM綿花栽培を急速に普及させたインドでは、買いたたきや健康被害により農民の自殺続出が社会問題になっている、等々。

DVD「世界が食べられなくなる日」

フランスの勇気のある映像作家は、同国カーン大学(University of Caen)研究陣のマウス実験の恐るべき結果を紹介した。モンサント社製の遺伝子組み換えトウモロコシ「NK603」系統（同社製・除草剤「ラウンドアップ」に対する耐性をもたせるために遺伝子が操作されている）を給与されたマウスと非GMトウモロコシを給与されたマウスの比較実験を行なった。通常のマウスの寿命に匹敵する2年間にわたる実験だ。このような長期の実験は初めてらしい。

2年間の実験結果、GMトウモロコシ給与を受けた、あるいは除草剤「ラウンドアップ」に接触したマウス群と非GMトウモロコシ給与、除草剤「ラウンドアップ」非接触のマウス群の間で有意な差が出た。つまり2年後、後者のがん発生率は30%なのに対し、前者のがん発生率は50～80%と高い水準なのだ。がん発生は、メスでは乳腺腫瘍、オスでは肝臓や皮膚の腫瘍となって表われ、また消化管での異常もみられた。しかも前者のマウス群のなかには早死するものも出現した。

研究リーダーのカーン大学のジル・エリック・セラリーニ氏は「GM作物と除草剤による健康への長期的な影響が初めて、しかも政府や業界の調査よりも徹底的に調査された。この結果は警戒すべきものだ」と指摘した。

*鈴木宣弘著『食の戦争 米国の裏に落ちる日本』文春新書、2013年8月20日 第1刷発行、pp.63~64

DVD「世界が食べられなくなる日」は、画面にフランス全土の原子力発電所の配置図をフラッシュバックで登場させていたが、わたしにはその暗喩が心に重く残る。東京電力福島第一原発事故が、「原子力エネルギーは人知で制御（コントロール）出来ない」ことを白日の下に晒したように、GM作物の危険性を余すところなくこの作品は示しているからに他ならない。

GM作物による負の連鎖

「コーンベルトと呼ばれる米中西部のトウモロコシ生産地帯で、遺伝子組み換え(GM)トウモロコシに耐性を持つ害虫の被害が広まっている。一角をなすイリノイ州の現場を訪ねると、予想を超える早い出現に殺虫剤の使用が増えている。GM作物の新たな課題が浮かび上がる」(「朝日新聞」2013年7月31日付け夕刊)

イリノイ州では「Btコーン」(Btコーン:「バチルスチューリングエンシス(Bt)」という土壤中の細菌がつくる殺虫作用のあるたんぱく質の遺伝子が組み込んである)というネキリムシの駆除効果を有するGMトウモロコシが州生産全体の90%を占めるといわれる。Btコーンの効かない「耐性ネキリムシ」が出現することになった。結局、耐性虫の出現によって殺虫剤の使用量が増えるという皮肉な結果を招いているのだ。いま大きな問題となっているTPP(環太平洋連携協定)で、日本で一定制約を受けているGM作物の解禁が懸念されるところだ。

「いま流通している野菜のタネについて」

渡辺農事(株)北海道営業所長 安達 英人

戦後食料難で伸びた「F 1」種

「F 1(雑種第一代)」種が誕生する以前の野菜のタネはすべて在来種で、その土地の気候や風土に合った作物を栽培していました。伝統野菜とか地方野菜と呼ばれるものです。今、市場で流通している野菜のほとんどは雑種第一代です。なぜそうなったかというと、戦争で食料がなくったことが大きな要因です。食糧難に陥った日本政府は、収量を高めるために産地の大規模化を図りました。また通年で供給でき、しかも規格がそろっているなど流通しやすい野菜を求めたのです。

そういったニーズに応えたのが「F 1」種です。伝統野菜は形質が固定されていないものが多く、大量生産には向かなかったのです。地産地消であれば、今はやりの直売所のように野菜の形にばらつきがあつても何も問題はありませんが、食料難の日本では大量にくまなく、ときれことなく均一の野菜を供給することが必要でした。食料増産の掛け声のもと、ビニールハウス、農薬、化学肥料、そして「F 1」種が主流となっていました。

両親の優れた形質のみ受け継ぐ「F 1」種

F 1は形質の違う品種(固定種)の両親を掛け合わせたもので、その第一代目は両親の形質のうち優れたものだけが現れて、劣った形質は出てこないという遺伝の法則を利用したので

す。高収量、高品質、耐病性などの好ましい特性を持つた作物を人為的に交配させて、その両親の優れた形質を一代目に兼ね備えさせるのです。ですから種苗メーカーはさまざまな野菜の、いろいろな形質がある固定品種のタネを持っています。これがないと「F1」種はできません。「F1」種のタネは販売しても、固定種である両親のタネは売りません。種苗メーカーはこの親の品種改良に力を注いで研究開発をしているからです。ちなみに雑種二代目になると遺伝的に固定されないため、形質はバラバラになってしまいます。

「F1」種の品種改良のポイントは、生産者や消費者からのニーズです。例えば生産地では高齢化により機械化が進んでいるため、ダイコンやニンジンは機械で収穫しやすいようますぐにします。加工業者に対してはいぼなしキュウリに改良し、加工やすいようにします。消費者には高糖度で甘みの強いトウモロコシやトマトの改良が進んでいます。

流通する9割のタネが海外産

ホームセンターなどで扱っているタネの産地は、外国になっていることが多いです。これは野菜の種類や形質によって、日本よりも交配しやすい環境の農場や施設を、日本の種苗メーカーが海外に持っているためです。生産費などのコストが安いのもその理由ですが、安定して発芽する「F1」種のタネをとるために海外に進出しているのです。ですからタネの国内生産は、今は10パーセント以下です。採種農家の高齢化などで採種基盤は海外に移転しています。ただ一方で、海外では綿密な栽培管理ができずに品質の良いタネが取れないといったデメリットもあります。

こういったタネを扱う種苗メーカーは、大手の「タキイ種苗」(京都)と「サカタのタネ」(横浜)の2社が有名で、どちらも野菜と花のほとんどの品種改良を手掛け、全国販売しています。どちらも年間400億円以上の売り上げがあります。次に準大手3~5社が続き、年商100億円程度です。このクラスになるとすべての品種に手を出すというより、特徴を出した改良をしています。百貨店と専門店の違いですね。

穀類は公的機関が開発と改良

一般社団法人「日本種苗協会」に加盟しているメーカーと卸、小売店は全国に1187社あり、そのうち北海道には約40社のタネ屋さんがあり、多くは農村地帯に店を構えています。ただ、コメや麦、大豆といった穀類については、日本人の主食という観点から、国や都道府県の研究所など公的機関がタネの開発や改良に当たっています。

タネの世界はとても奥が深くて面白いです。食卓のレシピを考えながらタネを植えて育てるのもいいですね。タネをまいて育てて、それを調理して家族で食事をする。お店で野菜を買うだけでなく、ぜひ自分でタネから育ててみてください。

■安達 英人(あだち ひでと)氏 プロフィール



1962年生まれ、小樽市出身。北大農学部卒業後、雪印種苗入社。野菜の品種改良などに従事し、2008年に退職。同年に渡辺農事入社し、現在北海道営業所所長。
「北海道らしい食づくり名人」「北海道フードマイスター」。産地育成、栽培技術指導のほか、消費者向けの講演もする。



食の思い出の季節の話題

のつれづれ日記



電気自給への一歩 ミニ太陽光発電

岩見沢市栗沢町 有機農家 林 宏



脱サラ就農9年目の今春、自宅脇に、太陽光発電セットを組み立てました。畳大のパネル3枚と、自動車に使われているようなバッテリー4つを中心とした、小さな発電所です。自作した電気で洗濯機が「グオン、グオン」と力強く回っているのを見ると、少し嬉しくなります。

最近では、街のあちこちで見かけるようになつた太陽光発電。ただ、実際に取り組むとなると、設置時の費用や積雪対策など、けっこうな心構えがいるもの。その点、電力会社への売電をしない独立型の発電セットは、予算や設置に使えるスペースに合わせて、気軽に取り組めるのが魅力です。

小型とはいえ、使い応えはなかなか。居間の照明、洗濯機、テレビ、パソコン、炊飯器（保温なし）の電源が、発電セットでまかなえています。

もつとも、これは日が長くて発電量が最大になる季節での実績なので、冬にどこまで使えるかは、まだわかりませんが。

売電をしないので、設置費用の「元を取る」のは難しいですが、自前の電気で生活しているという実感は、いっそう明確。また「安定供給」を盾に自然エネルギーを押さえ込みたい意図の電力会社に左右されることもありません。

電気を作ろうと思ったのは、脱原発の願いはもちろんですが、我が家の「自給力」を上げたかったから。食糧品やエネルギーなど生活必需品の価格でさえ、投機資金や為替相場といった庶民の手の届かない理屈に振り回されるのが、「どうも気に入らない」からです。

同じ理由から、電気のほかにも、衣食住それぞれの分野で自給に挑戦してみたいものがあります。一度にたくさんは実現できませんが、少しずつ形にしていきたい。そんな気持ちがこもった、小さな発電所なのです。

TPP(環太平洋連携協定)の先にあるもの —貧困大国アメリカと、私たちの未来

フリージャーナリスト 堤 未 純

富が1パーセントに集中

日本は7月下旬にTPP交渉に参加しましたが、この協定が日本に何をもたらすのかを考えた場合、現在アメリカで実際に起きていることを知るのが一番分かりやすいと思います。

アメリカは今どうなっているのか。まず指摘したいのが、あらゆる分野で民営化を進めてきたことで、すべての業界において競争原理が働き、一部企業の寡占化が進んでいることです。ニューヨーク・ウォール街で多数の市民がデモを行い「ウォール街を占拠せよ」「私たちは99パーセントだ」と訴えたのは象徴的な出来事です。まさしく1パーセントの裕福層にアメリカの富が集まり、その層の多くがグローバル企業に属する人たちなのです。

アグリビジネス傘下に入る中小農家

農業ではモンサント社やカーギル社などの巨大穀物企業、いわゆるアグリビジネスがほとんどの中小農家を傘下に收めてしまいました。1950年は90パーセントが個人農家でした。地域の中に農家があったので、そこで生産されたものを消費者が食べられる「地産地消」が各地にありました。しかし2013年には、たとえば養鶏業界では上位4社が60パーセントのシェアを占めるようになってしましました。そして98パーセントの中小農家が親会社のアグリビジネスと契約せざるを得なくなつたのです。

そうなると、農家は自ら生産したいものを自ら決められなくなり、親会社に逆らえなくなってしまったのです。タネから肥料、農業機械に至るまで親会社の言うとおりにしないと契約違反にされてしまう。違反と見なされると、親会社から借金をして購入した高額な機械の融資もその時点で切られてしまう。まさに親会社の言いなりでしか、農業を続けられなくなつたのです。

学校給食も外食産業に委託

農業だけではありません。医療や保険、福祉、教育といった命にかかわる分野にも競争原理を持ち込んで市場化しました。小学校の予算はどんどん削減されたので、給食は安価な外食産業に委託してしまいました。日本でおなじみの「マクドナルド」「ケンタッキー・フライド・チキン」「サブウェイ」などの大手外食のファ

ストードが学校給食に入り込んだのです。高カロリー、高タンパク、高脂肪の給食ばかりを食べている子どもたちはどうしても肥満にならざるを得ません。3人に1人の子どもが肥満と言われ、糖尿病の子どもも多いのです。

ちなみにオーガニックの基準も非常に緩くてびっくりしました。「オーガニックチキン」を掲げる平飼いの農場を取材に行った時も、鶏たちは狭い室内に詰め込まれてまるでブロイラーのような感じでした。アメリカの基準では、室内の一角に外に出られる出入り口があればオーガニックと言うことができるので、「こんなに詰め込んでどこがオーガニックなの?」と目を疑ってしまいました。

本当の敵は「国民の無力感」

グローバル企業に富が集中した結果、生活保護は6人に1人、失業率は20パーセント、医療保険破産者は1年に90万人、家屋の差し押さえは7秒に1軒—これが、この10年でグローバル化を進めていったアメリカ社会の現状です。貧困層が拡大し一般市民がいつ貧困層になんでもおかしくない。「私たちは99パーセントだ」と主張するのも無理はありません。

日本がアメリカのようにならないためには、どうしたらよいのでしょうか。TPPは参加国内で関税障壁を撤廃し、あらゆるもの市場化しようという協定です。アメリカのこの現状が、日本のTPPの先にあるのは間違ひありません。アメリカと自由貿易協定(FTA)を結んだ韓国の現状を見ても、お分かりでしょう。安いアメリカ産の輸入農産物がどんどん入り、貧富の格差も拡大しています。ですから、私はTPPには絶対反対です。

本当の敵はどこにあるのか。アメリカなのか。TPPを進めるグローバル企業なのか。私は、国民1人ひとりの中にある無力感だと思っています。既にTPP交渉は始まっていますが、協定が締結されたわけではありません。アメリカのような事態にならないよう、1人ひとりが政治から目を離さず、そらさず、あきらめないでください。

(7月27日、札幌市内で開かれた「医療九条の会・北海道」主催の講演より収録)

■堤 未果(つつみ みか) 氏 プロフィール



東京都生まれ。和光小、中、高校卒業後、アメリカに留学。ニューヨーク市立大学大学院国際関係論学科修士課程修了。国連婦人開発基金(UNIFEM)、アムネスティ・インターナショナルNY支局員を経て、米国・野村證券に勤務中、9・11同時多発テロに遭遇。その後、日本とアメリカを行き来しながら、フリージャーナリストとして各種メディアで発言、執筆・講演活動を続ける。著書に「ルボ貧困大国アメリカ」「ルボ貧困大国アメリカII」「(株)貧困大国アメリカ」(いずれも岩波新書)など多数。



大豆プロジェクト活動報告

～前代未聞!豪雨の交流会～

大豆プロジェクトリーダー 五十嵐美由紀

去る8月24日、毎年晴天に恵まれていた交流会ですが、まさかの豪雨。大豆トラスト参加者と自給ネット会員9名、生産者4名、スタッフ2名合計15名の参加者は、心配そうな面持ちで公民館に集合しました。

しかし一時的に雨が上がり、生産者の山崎さんから、大豆畑でお話しを聞くことができました。「春先の長雨で、やっと種をまいたと思ったら、干ばつで芽がでて来ない。何回畠の土を掘ったかわからない。もう、まき直そうと思い、会長の渡辺さんに相談に行くと『待て、今雨が降るから』と、言われ思い留まった。6月中旬に待望の恵みの雨が降り、なんとかここまでになった」と、話してくれました。「今年も美味しい大豆が食べられそう」と、安堵しながら大豆畑をバックに記念写真を撮り、大豆畑を後にしました。

次に毎年野菜のもぎとり体験をお願いしている、池田さんのお宅におじやました。最初は、おめあての落花生のハウスへ。少し早めではありましたが、他では体験できない落花生抜きの醍醐味に、子供のように歓声を上げていました。たわわに実ったナス、トマト、ピーマンの収穫体験を堪能し、毎年みごとな野菜作りを実践する池田さんに感謝し、農園を後にしました。

いつもは青空のもと、汗をかきながらのバーベキューですが、今年は協議会副会長の佐藤さん宅の倉庫をお借りし、ゆっくりとランチタイムを楽しみました=表紙写真=。生産者からは、「大豆トラストを始めるまで、ツルムスメを食べたことがなく、こんなに美味しい大豆だとは知らなかつた」。消費者からは「毎年参加していた娘が、今年は受験で来られない。落花生を探つて来るよう言われた。来年はまた一緒に来たい」と、話してくれました。

長年交流を続けるうち、この地域がみなさんの第2の故郷になっているのだと思います。前代未聞！豪雨に見舞われた思い出深い交流会を終えました。



食育プロジェクト活動報告

～学んで食べて 食育講座現地学習～

プロジェクトスタッフ 内藤 圭子（内藤あんがす牧場）

8月24日(土)、受講生17名、保護者8名、スタッフ13名参加で現地学習が行われました。子どもたちに命をいただいている事を実感させたい、自分で収穫した野菜をおいしく食べて苦手を克服してほしい、などの目的を持つた現地学習でした。

自家用に作っている野菜畑では、採る数だけ決めて後は自由に子どもたちに採ってもらいました。いもは宝探しのノリで、泥も気にせず随分楽しんで沢山収穫していました。採り忘れて見事に大きくなったりキュウリやナスを見つけて大得意になったり、ミニトマトをもいで恐る恐る口に入れてニッコリしたり、太いニンジンが採れず抜きまくったり、ネギが抜けずに苦労したりと、そんな子どもたちの様子を見ているお母さんたちも笑顔でした。

その後、牛に会いに放牧地へ行きました。牛は暑いので森の中で涼んでいました。子ども

たちには、牛は臆病なので静かにして走り回らないように、また、糞が落ちているので気をつけるように話しました。最初はおつかなびっくりで歩いていた子どもたちですが、こちらが騒がなければ牛はおとなしいと分かったのか、随分近くに寄って牛たちに会うことができました。来る途中のバスの中でした事前学習のおかげで、より興味を持って牛に会うことができたのだと思います。「牛が大きい」とか「ウンコが臭い」という声が子どもたちから聞こえていました。肥育の牛舎も見学しました。放牧地から肥育の牛舎は遠いのですが、みんな元気に歩きました。「餌のにおいが酸っぱい」「お肉になる牛はとても大きい」と子どもたちの感想も様々でした。

お待ちかねの昼食はバーベキューでした。収穫した野菜を焼いてモリモリ食べました。苦手な野菜は嫌がると思っていましたが、こちらが拍子抜けする程みんなべろりと平らげていました。特徴の違う3種類のお肉を用意していましたが、「おいしい!」と、焼くのが間に合わない勢いで食べていました。

行程最後の安平農場でのトウキビもきは、雷と土砂降りの雨で残念ながら中止となり、事前にもいておいてくれたトウキビをいただきました。

私は今回、スタッフでありながら受け入れ先というお得な役割をさせていただきました。子どもたちの生き生きした様子に改めて現地学習の重要さを感じると共に、こちらもとても楽しい1日でした。



種(タネ)プロジェクト活動報告 ～タネプロ 始まりました～

プロジェクトメンバー 寝川 謙二

そういえば私たちが食べる野菜やお米のタネって、だれがどこでつくっているの? そんな素朴な疑問から「種(タネ)プロジェクト2013」は始まりました。実は知っているようでも知らないのがタネの世界。どこでだれがどんなタネをつくっているのか、とことん勉強しよう。そしてタネから畠のこと、食卓のこと、日本の食糧のことを考えてみよう—「タネプロ」はそんな取り組みを目指しています。

まずはタネの基礎知識から学ぼうと「知っておきたいタネの世界」と題した2回の講演会を開きました。第1回は自給ネット理事で酪農学園大名誉教授の中原准一先生が6月27日に「誰がタネを制するのか」をテーマに札幌・エルプラザでお話しました。多国籍企業が遺伝組み換え種子でタネ市場を占めつつある実態を、分かりやすく丁寧に説明していただきました。

続いて8月27日には種苗メーカー・渡辺農事北海道営業所の安達英人所長が「いま流通しているタネについて」と題し、主に野菜のタネについて話しました。直売所からゆずつもらつたというトマトやトウキビも持参し、実物を見ながらタネにまつわるあれこれも聞きました。最後に持参した野菜すべてを参加者全員にお土産として配ってもらい、とてもおいしい講演会となりました。中原先生、渡辺所長の詳細は「今日の話題」に掲載しておりますので、そちらをお読みください。

9月20日には栽培している野菜はすべて自家採種しているという札幌市南区の「ファーム伊達家」を、理事数人で訪問します。その内容は次号でお知らせいたしますし、伊達寛記代表をお呼びした講演会なども計画しています。そちらもぜひご期待ください。



食と農に関するコラボレーション 「楽食ラボ」活動報告

担当理事 前濱 喜代美

自給ネットでは今年度、学生を中心となって食や農の活動を行なうサークルを企画しました。酪農学園大学、北海道大学、そして食育プロジェクトで連携している藤女子大学に呼びかけたところ、関心を持ってくれた学生さんたちが集まり、活動が始まりました。

【第1回】7月11日（16名参加）

興味を持ってくれた学生さんに集まつてもらい「食」や「農」についてどんなことが知りたいか、どんなことをしてみたいか自由に意見を出してもらいました。

・子どもたちに食育をしたい ・食と農業を通して人のつながりを作りたい ・消費者に見た目だけではない農産物の価値の認識を広げたい ・生産現場や流通現場を知りたい ・自分たちが活動で得た知識、情報をフリーペーパーなどを作って伝えたい ・写真が好き(得意)なので映像でも伝えたい、などなどたくさんの意見がでました。

農場を見て生産者の話を聞きたいという要望が多く、C S Aを実践している長沼のメノビレッジを訪問することが決まりました。

さらに次回会合までに、各自この活動サークルの名称、具体的な活動、運営方法などを考えてくることにしました。メーリングリストもできました。

【第2回】8月1日（15名参加）

サークルの名前が「楽食ラボ」に決定！

「学生が食について学んだり体験する」→学食ラボ（ラボラトリー）→「学食」だと学生食堂みたい→「楽食ラボ」（楽しく食について学ぶ）

今後の取り組みについては、自分たちのやりたいことを整理し、4つのグループに分かれて活動することにしました。

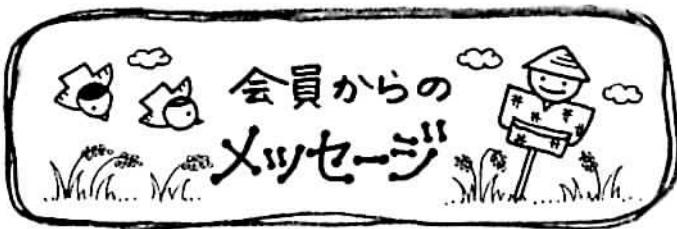
①酪農・畜産 ②生産・流通 ③食・食育 ④学習・ディスカッション

各グループのリーダーを決め、活動状況はメーリングリストで全員が共有し、他のグループへの参加もできます。また定期的に全体会議も行います。→次回全体会議は9月30日

【第3回】8月22日メノビレッジ訪問（11名参加）

メノビレッジではレイモンド・エップさんからC S Aについて、「適正」規模の考え方などお聞きし、パン工房や雪冷房施設、油絞り機、平飼いの鶏舎、畑、田んぼなどを見せていただきました。隣接した森を買い上げ小道を付け、まさに「ふるさとの里山」で、ここはC S Aの会員の「いなか」になっているということでした。

昼食は塩とバター以外はすべてメノビレッジ産という、パンに野菜、卵、ピクルスなどを豪勢にはさんだサンドイッチを皆でおなかいっぱい食べました。



「農家の暮らし」

北海道大学大学院生 高槻 森水

今年度から始まった「楽食ラボ」のメンバーとして自給ネット会員になった高槻と申します。

私は、在籍している農業経済学の大学院の研究や実習の中で、よく農家さんのお宅に泊まり込みで農作業をさせてもらうことがあるのですが、そのたびに、農家の「暮らし」がとても魅力的だと感じます。もちろん、3日～1週間程度の実習なので、それだけで農家の暮らしを理解したとは言えませんし、人によって暮らしのあり方も異なると思います。しかし、農家で数日間生活するといつも、じんわりとした幸せな気分を持ち帰ることができます。

早寝早起きをし、毎日3食新鮮なものを食べ、身体を動かして働き、一服の時間に談笑するという生活は、言葉にするとなんということもなく聞こえますが、実際に体験してみると、これほど人間らしく、魅力的な暮らしというのは、ほかにはないものだといつも感じます。

農業が持つ多面的機能の価値が近年再評価されていますが、この農家の生活様式もまた、大きな価値を持つ財産であると思います。そしてその価値を認識しているということが、農業にかかる研究をしたり農業を通して人とかかわっていくなかで、重要になってくるのではないかと、最近よく感じます。

「ハスカップのつぶやき」

札幌市 吉野 利子

6月から食育プロジェクトのスタッフに加わった吉野です。食育に関しては何年か経験して来ましたが殆ど手さぐりの自己流でやってきました。子供達にまず、おいしい物を食べる事・作る事・知る事は楽しいんだと知ってもらうのが目的で、基本的な食事のしつけや環境に目を向ける等の考えが欠けていたことを食育プロジェクトで感じました。あまり深く物事を考えない性格で直感で進んで来た私に、この食育プロジェクトがいろいろな事を気付かせてくれました。1回の講座に対して、詳しく全員が把握できるように丁寧に打ち合わせする、終わった後もしっかりと反省して次に繋げる等、当たり前のことが大切な事だと改めて感じました。そしてもう一つ楽しみにしているのは、若くてかわいいスタッフの学生さん達の話しが聞ける事です。勉強した事を教えていただけるのもありがたいですし、何より肌がきれい！目の輝きもきれい！ウキウキします♪…オヤジカ！(*_*)

子供たちのための食育ですが私自身がとてもいい学習をしています。そしてプロジェクトスタッフのみなさま、平均年齢上げちゃってごめんなさい(^o^)

事務局からのお知らせ

9月申込み・11月お届け

1回だけの

「小麦トラスト スペシャル版」復活!!

2002年から始まり、2011年に惜しまれながら終了した小麦トラストですが、この度1回だけのスペシャルバージョンで復活します。

TPPへの参加が決まった今、大きな打撃が予想される北海道産小麦。その道産小麦を作った美味しい製品を食べながら、食べ支えの大切さを改めて考えていただけたらと願い、企画しました。

トラストで人気の高かつた製品をギッシリ詰めてお届けします。
さらに、あのまほろしの留萌産ルルロツソで作った生パスタも新登場です。

みなさんのご参加をお待ちしています！

詳しくは、
別紙チラシを
ご覧ください

■講演会■

「原発紙芝居・わたしたちのくらしと泊原発」

紙芝居演者 泊原発廃炉訴訟原告団長 斎藤 武一さん(60)

25歳から30年以上にわたり、故郷・岩内の漁港防波堤で海水温を測り続けている斎藤さんが、自ら作成した紙芝居を使って、わかりやすく丁寧に泊原発の歴史や隠された事故、電力料金の値上げや、再稼動についても話します。

日 時：10月26日(土) 午後1時30分～午後3時30分
場 所：かでる2・7 1070会議室(札幌市中央区南2西7)
参加費：500円
定 員：60人(定員になり次第、締め切ります)

詳しくは、
別紙チラシを
ご覧ください

■会員交流会に参加しませんか■

「藤崎代表の農園で、楽しく交流しましよう」一普段なかなか顔を合わせることの少ない会員同士ですが、昨年もお訪ねして好評だった藤崎代表の農園で会員交流会を開きます。農園は遠くの山々が一望でき、風景も素敵なところです。

秋のゆったりとした時間の中で交流を深めましょう。

日 時：9月28日(土) 現地集合 11:00～15:00
場 所：仁木町 自給ネット代表 藤崎 史夫さんの「藤崎農園」

詳しくは、
別紙チラシを
ご覧ください



今年の自給ネットは、新しいプロジェクト「種プロジェクト」「楽食ラボ」も活動が始まりました。また、今回ご案内している小麦トラストが限定復活、そして斎藤武一さんの学習会。さらに藤崎代表の農園での交流会と盛沢山の内容です。是非、会員の皆さんも興味のあること、一緒に学んでみたいことなど活動に参加してみてください、楽しい仲間が待っています。まだ会員さんでない方も誘って自給ネットの輪を広げていくのにもご協力お願いします。

(事務局 本村 雅幸)